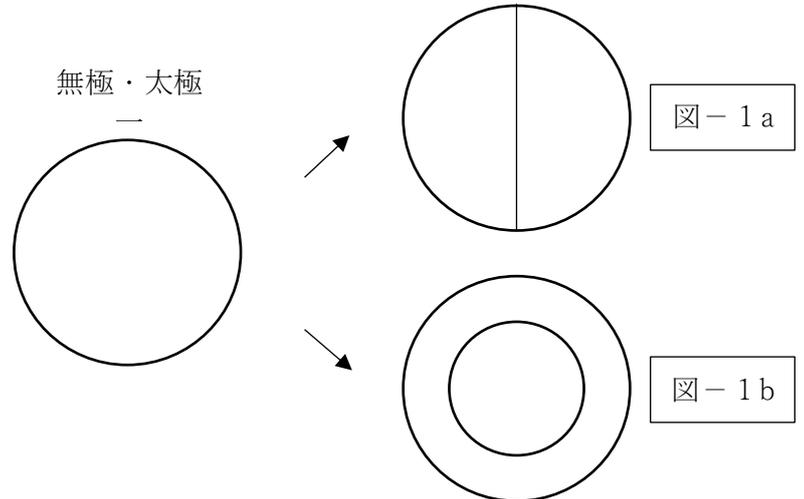


【Zigzag-memo No50 の 2】 陰陽に係る「二分割と三分割」

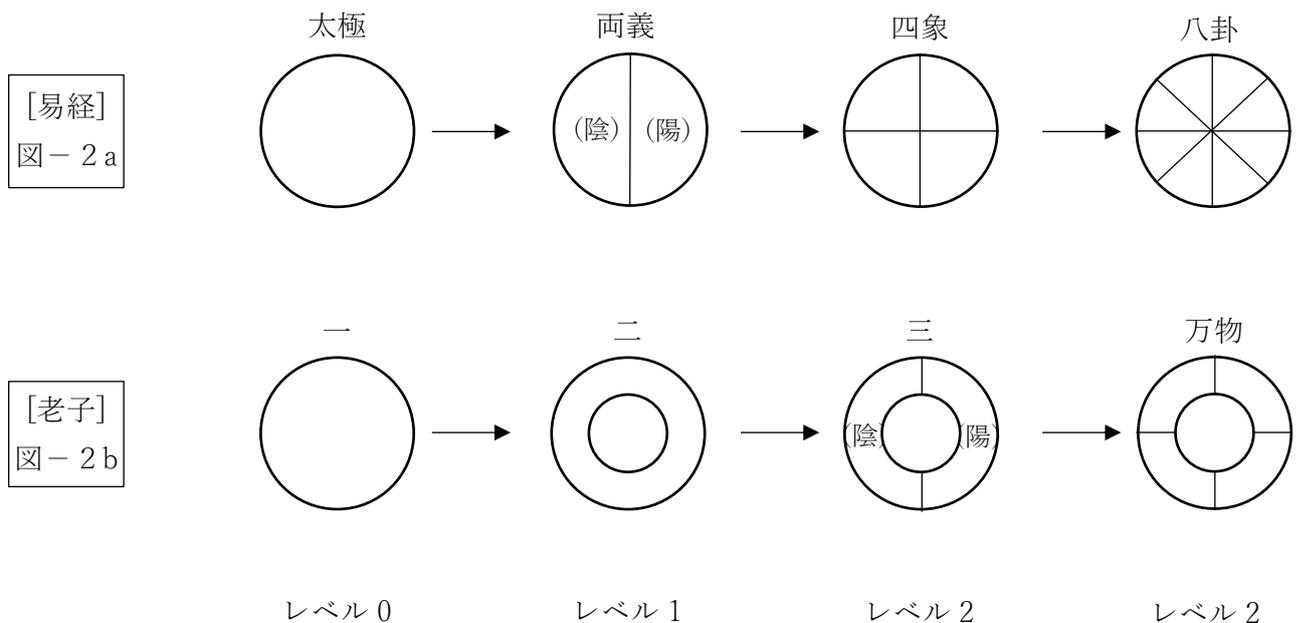
山田慶児著「混沌の海へ」（朝日選書）などを参考に、私の理解を含めて記述します。また、武田時昌著「術数学の思考」（臨川書店）によれば「中国の自然哲学のバイブルと言え、『易』と『老子』」とあります。

その 1；混沌、未発・未分の無極（太極）の円を分割するには、図-1 ab のとおり、図-1 a の左右二分法と図-1 b の内外二分法の二通りがあります。前者は「易経」の、後者は「老子（道教）」の考え方で、これを前提に図-2 ab のように発展させます。



✓¹；易経では、「易に太極あり、これ両儀（したがって陰陽）を生ず。両儀は四象（したがって四季、四方）を生じ、四象は八卦（八方）を生ずる。」の表し方です、徹底した二分法（すなわち、2の累乗で分化発展）になっています。

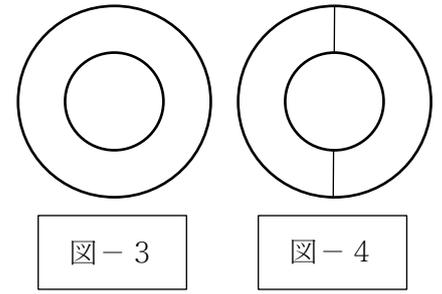
✓²；老子では、「道は一に始まるも、一にしては生ぜず。故に分かれて陰陽と為り、陰陽和合して万物を生ず。故に曰く、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰気を背負い陽気を胸に抱き、この二つを媒介する沖気^{ちゅうき}によって調和を為している。」の表し方です、「天地の万物・森羅万象」が自然的に徐々に増加して行くイメージを持ちます。



この老子の解釈について山田氏の説によれば、「一は二を生じ」とは空間（一）の左右分割ではなく同心円状内外への分割であり、「二は三を生じ」はレベル 2 のとおり外部空間（外部円）の左右（上下）分割であります。レベル 2 以降の内部空間（内部円）はあくまでもレベル 0 の一（混沌、未発・未

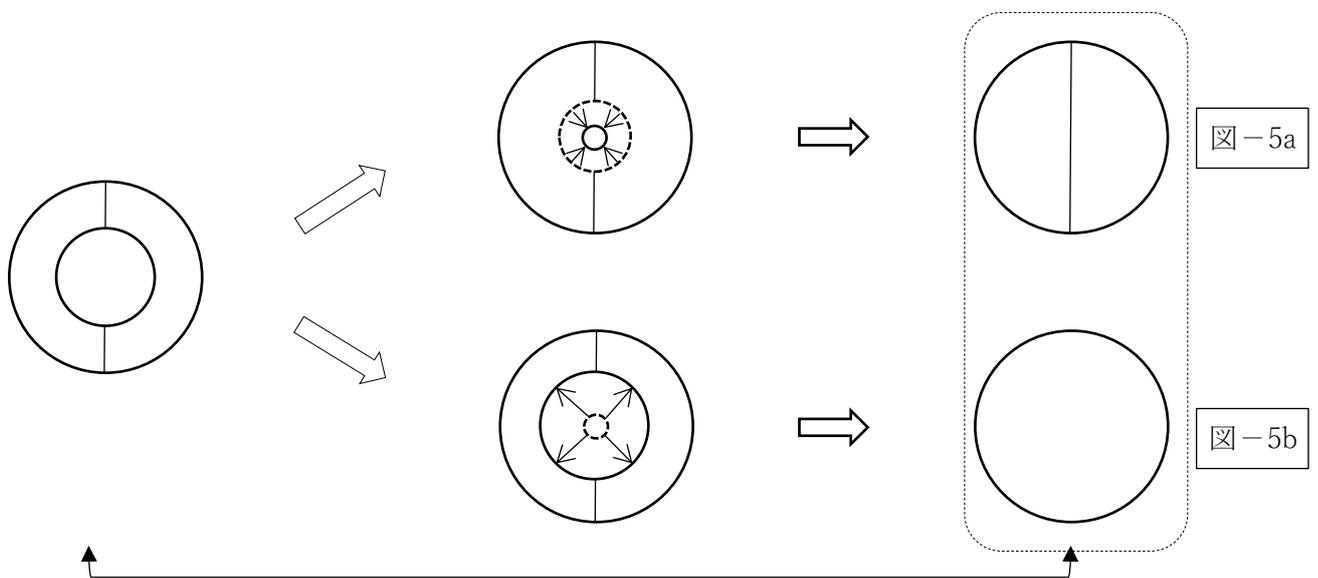
分)の性質と同等の単一空間と見ます、無極・太極と同じ性質の分割されない混沌、未発・未分状態（中性・中立・中和）とします。なお、レベル1の2分割においては、左右にせよ、内外にせよ、分けて陰陽二元(質が真逆・正反対)を配置するが、それぞれがその場所を占有固定するのではなく、陰陽二つの種類が有ると言うことを強調する、特徴付けるための表現であります。

その2；それらの実用に向けた私の捉え方について、一つ目は図-3のとおりで、内円は無意識層・無分別智の世界を、外円は意識層・分別知の世界を意味します。さらに、図-4のとおり図-2bレベル2の「三」に注目します、図-3の延長線で捉え、外円の意識層・分別知界は陰陽を帯びたものになり、私においては仏性と魔性の闘ぎ合いとなります、その内(内円)にはその両性に惑わされない真



我・真性の存在も自覚出来ます。これも私は、「一極(全一)二元の三律構図ワンセットZ」と称しています。

その3；その三律構図は発展的に図-5のように解釈出来ます。陰陽二元相對(待)性原理の応用編とも言えます。三律構図ワンセットZは、内部空間(一)の縮小によって二律構図に近付き、内部空間(一)の拡大によって一律構図に近付きます。「もの・こと」の認識法に大いに活用出来るものと思っています。図-5aの二律構図は陰陽を帯びた活動性・対立と重ね、図-5bの一律構図は安定性・平和と重ねることも出来ます。したがって、内円相当の混沌、未発・未分の無分別智界に対して如何に栄養補給し、育成していくかが課題となります。



その4；(図-6・図-7を参照のこと) 前記図-4の三極構造(三律構図)と等価と見るのが、天秤秤、あるいはソーソーです。三律構図における中心の小円が支点对應し、棒の左右の支点からの距離と重さが陰陽二元対応です。

図-6aは視点から左右等距離の位置に同重の重りを置いて平衡している状態です。

図-6bは同じ距離の所なのに重量が異なると重い方が下がります。

図-6cは同じ重さなのに距離が異なると長い方が下がります。

以上のことから平衡に係り、二つの要素、距離と重量が関係していることが理解出来ます。

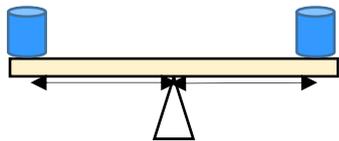


図-6a

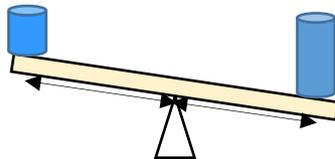


図-6b

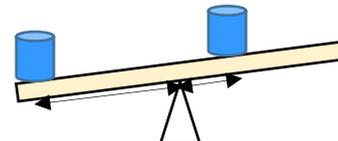


図-6c

図-6bあるいは図-6cの傾いている状況下静止している状態を細部に見ます。質量 $m=50\text{kg}$ 、重力加速度 $g=9.8[\text{m/s}^2] \doteq 10[\text{m/s}^2]$ とすると、重力 $W=m \times g=50 \times 10=500[\text{N}]$ となります、摩擦係数を μ とします。傾けた時のポイントは、重力は下向き(鉛直方向)に作用(地球の中心に向かって作用)、面に対して垂直に作用する垂直抗力が生じ、「静止」しているということは摩擦力が発生して、その三つの力が釣り合っている状態にあるということです。

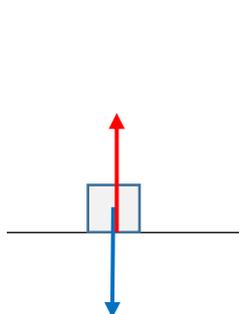


図-7a

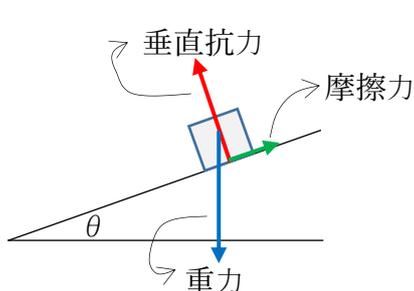


図-7b

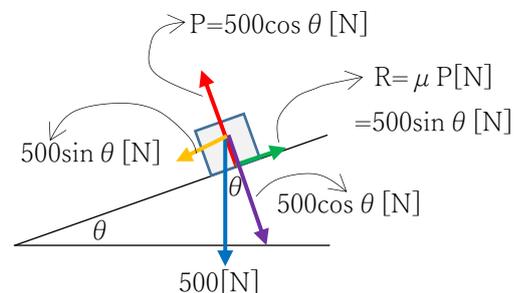


図-7c

均衡が破れると、傾きに絡まる^{から}が、すなわち、踏ん張るための摩擦力という新たな抵抗力が自生するのです。まったく無意味な力を生まなければならないのです。

性格、思想信条、考え方、心・言・行がどちらかに偏っていると、つまり、「俺がオレ我」と片意地を張って自己主張がさく裂すると、それはすなわち、どちらかに偏ることとなり、まったく無意味かつ無駄な摩擦力を生まざるを得なくなります。

(end)